

祭りと年中行事は現代の私たちに必要か

3年2組08番 草野都
3年2組14番 辻中綾香
3年2組16番 中島すず乃

Keyword:「祭り」「年中行事」「継承」「地域活性化」「豊作祈願」

1.はじめに

祭りについて探究しようと思ったきっかけは、去年、新型コロナウイルス感染症拡大のため2年ぶりに再開された地元の秋祭りにある。その祭りには、宮入という神輿を担いで神社に入っていくという風習があるが、6つの神輿のうち2つ程は、地域の過疎化や担ぐ人の高齢化などが原因で、違う地域から人が集まって担ぐようになって宮入を行うようになっていた。また、観に来る人が、地域の中学生や町のおじいちゃんやおばあちゃんなどの高齢者ばかりで若者や中年の人がいなく活気もなくなっていた。その時、私は古くから続いている祭りがなくなってしまうのではないかと危機に思っしまい、これをきっかけに、自分も家族も祭りの現状を何も知らなかったので、調べて発信したいと思った。

2.序論

はじめに、日本では昔から各地で地域独自の祭りや年中行事が行われている。また、近年では、ハロウィンやイースターなどの海外発祥の行事も盛り上がりを見せている。だが、日本の代表的な祭りのねぶた祭りや祇園祭り、地元の祭りに参加したり携わったりしたことがある人は少ないのではないだろうか。2015年の日本経済新聞のネット調査(引用)によると、伝統的な祭りに参加したことがあるかという問いに対し、あると答えた人が19.5%、ないと答えた人が80.5%を占めた(「祭りに参加したことがない」8割 ネット調査から、日本経済新聞 参照日:2023年11月24日 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO90744400Q5A820C1100000/>)

祭りは、地域を盛り上げるために必要な行事であり、子供からお年寄りまで、一緒に楽しむことができる。だが、近年では、日本の祭りは地域の過疎化や、祭りに必要な技術を受け継ぐ継承者が減っていることによって、減少傾向にあり、近年流行している新型コロナウイルスの影響で開催を見送っている祭りも多く存在する。その事実を知って、昔から受け継がれてきた伝統的な祭りが無くなってしまわないだろうかと考えた。都市に働きに出る人が多く、過疎化する地域が多い中で、より多くの祭りを残し、衰退させないようにするためにはどうすれば良いのかを探究していきたいと思った。人々が祭りに対してどのような意識を持っているのかを知り、祭りを継承していくために私たちにできることをやっていきたい。調べていくうちに祭りと同様、年中行事についても年々参加人数が減少していることが分かった。例えば、近年snsの普及による年賀状文化の衰退、節分行事では、豆まきは行わず、恵方巻きを食べることを行う人が多かったり、子どもの成長と共に七夕離れが進んでいたり、鯉のぼりが家庭から地域の河川などに建てられる事のように今後も家庭で行われなくなる行事が増え、いわゆる知っているけど行われないうちの年中行事が増えていこう。2019年1月29日に行われた、この一年に参加した行事の男女別調査(引用「日本人の年中行事に関する調査」マーケティング・リサーチ会社のクロス・マーケティング <https://www.cross-m.co.jp/report/event/ye20190129/>)でお正月やクリスマスはどちらも70%以上を超えているのに対し、お月見やひな祭りは10%を下回っている。一年の中でさまざまな年中行事が行われているのに、それを私たち含め意識せず過ごしてしまっているのだ。このことから、祭りや年中行事は現代社会において必要なものではなくなったのではないかと考えた。

3.本論 I

まず祭りや年中行事が私たちにとって重要であるのか疑問に思い、初めに祭りが行われなくなった原因は昔と今の祭りや年中行事に対しての重要性が変わったからではないかという仮説を立てた。石井研士は「情報化と年中行事」の中で次のように述べている。

昔は、作物の収穫の祈願や厄祓いとして行われて、さらに季節の節目を彩る日本の年中行事や祭りはこれまで農耕儀礼と深く結びついて行われてきた。[中略]だが第一次産業の需要が後退した。伝統行事の脱落をもたらした主な原因は産業化と都市化であった。大衆消費社会の到来と共に、広告や宣伝の役割が大きくなりクリスマスやバレンタインの隆盛と密接な関係を持つようになった。

これは、昔とは違い年中行事や祭りがお金を生む道具となり今と昔の年中行事の在り方が変わってきていると言うことを示している。日本の花火には、慰霊や疫病退散の意味が込められている。また、一説によると花火は死者の魂を導くお盆の「迎え火」や「送り火」の一種とも言われている。このことから、日本全国の花火大会には鎮魂の祈りや供養の気持ちを込めたものも多い。しかし、今では楽しむためのイベントとして、夏祭りの名前を挙げる人が多い。例えば、最近では、お祭りに行くと言わずと云っていいほど屋台があり、また多くの花火大会では有料席の設置があり、多くの収益を生み出している。また、年中行事の観点からは、近年Instagramの普及によりお月見やお彼岸などのいわゆる写真映えしないものは人気がなくクリスマスやハロウィンが若者中心にInstagramで人気となった。

そこで私たちは、年中行事に対する人々の関心度合いを調査するために、私たちは年中行事に対する人々の関心度合いを調査するために、奈良県立国際高等学校の3年生を対象にそれぞれ関心のある年中行事と祭りについてアンケートをとった。アンケート内容はどの年中行事に一番関心があるかとその理由、またなぜ関心のない行事があるのかというもので、結果は正月やバレンタイン、クリスマスなど海外から来た有名な行事は関心が高いことがわかった。一方で、こどもの日やひな祭り七夕など成長とともにしなくなったり片付けが手のかかる行事は関心が低かった。このことから年中行事において、その行事の関心のあるもののみ人気があり続けていて、関心のないものは離れていっていることが傾向として分かった。その原因として、「いつの間にか終わっていた」「何をするのかよくわからない」「子供じゃないから」という回答者の意見が出た。確かに、クリスマスは12月25日、バレンタインは2月14日、ハロウィンは10月31日、と毎年実施される日程は同じなのですぐに日付をいうことができる人が多いだろう。それに対してお月見は旧暦で決められているため毎年違う日付である。そのため毎年毎年今年の月見の日付を覚えるのは困難である。

また、祭りに関しても、80%以上が夏祭りに関心があるという調査結果が出て8%が伝統的祭りに興味があると答えた。その理由は、「楽しいから」「夏といえば夏祭りだから」「屋台が好き」と答える人が多く、その夏祭りや年中行事の意味を理解し、なくてはならないと思っている人は少なかった。このことから、ただ興味のある祭りや年中行事をするだけでなく意味や存在意義を理解しなければいけないことがわかった。

3.本論 II

次に、私たちは祭りや年中行事は何故あるのかという問いを立て、それについて考えた。私たちは、夏に地元で行われている祭りに行き、祭りの現状や祭りに行くメリットなどを確かめた。祭りには、小さい子供を連れた家族や、お年寄りの人など、たくさんの方が訪れていたが、高校生や若い人は少ないように思われた。私たちが感じた祭りのメリットは、花火や盆踊りなど、子どもからお年寄りまで、みんなが楽しめるイベントが開催されていることや、地元の祭りでは、普段あまり会えない友達や知り合いに会うことができることである。祭りの価値はそういうところからも生まれるものだと思う。また、観光地などで行われる大きなイベントでは、地元の人だけでなく、海外からの観光客や、他府県からもたくさんの方が訪れ、祭りはその地域の魅力を伝えられるポイ

ントでもある。そして、祭りには、必ずと言っていいほど屋台が出ており、屋台があることでより多くの人の関心をひいている。国際高校の生徒にとつたアンケートで、夏祭りに一番興味があると答えた生徒に、なぜその祭りに興味があるのかと問うと、「屋台があるから。」「美味しい食べ物をたくさん食べられるから。」といった回答が多く見られた。確かに、高校生、あるいは中学生は、祭りに屋台を目当てに行く人も多いと思う。またこのアンケートから、祭りに行く理由として、ただ「楽しい」から祭りに行くのだという人が多いことも分かった。友達、あるいは家族と一緒に祭りに行き、屋台でたくさん食べ物を買って祭りを楽しむ。そこで生まれた利益は屋台を運営している人に行くが、よりたくさんの方が祭りに訪れることで、利益は大きくなり、街に活気が溢れ地域活性化にもつながるといったメリットが祭りにある。また、SDGsの11番目の目標である、「住み続けられるまちづくりを」を達成することが出来るようになる。私たちは、現代の祭りの存在意義は、昔と異なり、人や地域との関わりであったり、過疎化や少子化が進んでいる世の中でも、地域を盛り上げ、みんなで楽しむことが出来ることだと思う。多くのクリスマス、ハロウィンなどは主に企業が運営するので、その利益は企業に行ってしまうため地域活性化には繋がらない。その一方で、神社や寺で行われるような伝統的な祭りや地元の人が行っている祭りなどは地域の人たちの協力で実施されるため地域活性化に繋がる。私たち高校生でも伝統的な行事と祭りを残すために何が出来るかを考え、私たちは伝統的な年中行事と祭りの魅力を発信することで守っていけると考えた。なので初めては、学校の放送で祭りや年中行事の日付が近づくとそれについて詳しく説明したり呼び掛けをしたり、自ら祭りや年中行事に参加し理解を深めることができた。国際高校では縦につながる交流会という場で積極的に一年生から三年生までの生徒にプレゼンテーションをしたり、奈良県国際高校主催の国際会議で私たちの研究結果を載せたポスターを掲載し、若い人たちだけでなく大人の人たちにも伝統的な年中行事や祭りについての現状と原因を知ってもらうことができた。その結果知らなかったことを聞いてよかった、祭りや年中行事に参加しようと思ったなどの肯定的な意見が多かった。さらに、私は毎年地元の祭りに参加しているが、去年、そのお祭りに参加しその良さを広めたい思いから私の友達や知り合いをその祭りに誘ったらその友達は楽しかったと言ってくれた。また、今年も相手の方からお祭りの時期を聞かれ今年も行きたいと言ってくれた。このように、私たちにも祭りを広め参加してもらうことが出来ることがあるとわかった。またこれからも身近な人から祭りや年中行事の魅力を発信していこうと思う。

4. 結論

私たちは校内放送やポスターセッション、プレゼンテーションなどで、国際高校生に祭りや年中行事の現状、取り組みについて伝え、知ってもらうことが出来た。これらの活動を通して、祭りや年中行事の存在意義は、地域活性化や人々のコミュニティの場だということが分かった。祭りは、現代社会において豊作祈願を願うなどの必要性がなくなったので、祭りの必要性は変わっているが、毎年行われる夏祭りや花火大会は街に活気があふれ、屋台などの出店やイベントなどによって利益も生み出し、地域活性化に繋がります。SDGsを達成できるだろう。また、年中行事も祭りと同じく、七夕、クリスマスなどに関連したイベントなども行われ、人々がつながる場でもある。したがって、現代社会において祭りや年中行事はなくてはならないのである。

5. おわりに

最後に、年中行事や伝統的な祭りは現代社会において減少や衰退をしている。だが、それらを活性化させることは地域、人との関わりなど様々な要素で活性化させることが出来ることわかった。私たちがこれまでやってきたプレゼンや発表をすることで認知を上げることができたので祭りや年中行事が衰退しないために、これからは自分たち出来ることを見つけ、衰退させないために自分たちに出来ることをやっていきたいと思う。

6.参考文献

1.日本経済新聞「祭りに参加したことがない」8割 ネット調査から、参照日11月24日

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO90744400Q5A820C1I00000/>

2.マーケティング・リサーチ会社のクロス・マーケティング「日本人の年中行事に関する調査」参照日11月24日

<https://www.cross-m.co.jp/report/event/ye20190129/>

3.石井研士「情報化と年中行事」参照日11月24日

<http://www2.kokugakuin.ac.jp/ishii-rabo/data/pdf/199804.pdf>